
イキルトイウコト - everlasting love -

宮田健志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イキルトイウコト - everlasting love -

【Nコード】

N0591B

【作者名】

宮田健志

【あらすじ】

自分の存在意義を見いだすことが出来なくなった少年。そんな彼が一人の少女と出会う……。

— p r o l o g u e —

何気なく進んでいく人生。

その中で、人はいつでも何かを失っていく。

失っていく先には、何があるのだろうか？

何故、人は歩き続けるのだろうか？

『生きる』ということをおぼれた一人の少年と、

『生きる』ということをおぼれた一人の少女の、

出会い、

そして別れ。

それは、

いつかは溶けて消えてしまふ、朝日に映える白雪のように、

いつかは枯れて落ちてしまふ、僻陬の地に咲く花のように、

儚く、

どこまでも綺麗な物語。

思い出の丘、憂鬱な俺

往く当てのない木枯らしが耳元で鳴く。

誰もいない、早朝の静かな丘。自分の住んでいる町が一望できるお気に入りの場所で一人佇む俺は、くだらない自問をただただ繰り返していた。きっと答えなど何処にもないような、無意味な自問。

何故俺はここに存在するのだろうか？ 何故俺は存在し続けようとするのだろうか？ 何故俺はこの何の意味もない毎日に終止符を打とうとはしないのだろうか？

何故、世界はこんなにも退屈なんだろうか？

誰かが聞いたなら「悩んだところでしょうがない」とでも言うだろうどうしようもない疑問。確かに俺がネガティブなだけかも知れない。でも、俺はその疑問を頭から切り離すことなど出来なかった。

死ぬまで半永久的に繰り返されるありきたりな毎日。幼い頃は起こること全てが目新しい物ばかりだったのに、今年で17を迎える今じゃ、それはマンネリ化した作業的なものでしかなくなっている。そんな中で見えてくるものといったら、この先にある『死』への恐怖ぐらいだ。

あゝあ……鬱だな。考えれば考えるほど鬱ぎこんじまう。漫画とか小説みたいにくっ、何か奇想天外なことでも起こらないだろうか？

「……なぐんてな。起こらないモンは起こらない、か」

小一時間もいただろうか。俺は先程まで自分の立っていた場所に背を向けると、ゆっくりと帰路についた。

俺の住む西水原町は、都会というには少し寂しく、田舎と言ってもそこまで未発達なわけでもない何処にでもあるような平凡な町。俺はここで生まれ、ここで育ってきた。

んで、そんな俺の名前は神崎裕也^{かんざきゆうや}。ごくごく普通の何処にでもいるような高校2年生、のはずだと自分では思っている。……まあ、他の奴等と比べて多少ネガティブなところがあるかも知れないけどさ。

今日は月曜日で学校もあるのだが、いつもよりも早くに起きてしまった俺は特にすることもなく、二度寝しようにも変に目が冴えてしまっていたので朝食を食べ終わるとこの丘に足を運んだ。間違っ
て目覚ましを一時間も早くに設定したなんて本当にどうかしてる。

しっかしここに来るのも久しぶりだな。近頃は進路の話とか色々
と忙しすぎた所為でなかなか来れなかったし。

町に続く山道を下りながら、初めてここに来たときのことを思い出
す。確か小学校に入っつてすぐの頃だっただろうか？

学校の休みの日か何かに、母親に「いいものが見れるよ」と言わ

れて連れてきてもらった。丘に着くまでに疲れちまって駄々をこねたのを覚えている。でも、丘に着いたときの俺は疲れとかそういうのはどうでも良くなっていた。

到着してすぐに目に入ったものは、丘の下に広がる西水原町。当時の俺からしたらとても立派な建物だと思っていた小学校の校舎がおもちゃ程度に見える。あん時は感激のあまり知っている建物を端から指さして母親に報告してたっけ。いつまでも喋り続ける五月蠅いだけの俺に優しく微笑んでいた母親の顔が忘れられない。

「今になって思えば、いい思い出の場所……か」

家の近くの歩道を歩きながら、小さく呟く。

家に着き、今度は登校の支度をする。学ランに着替え、適当に鞆の中と髪型をチェックすると、俺は自分のもの以外の靴がない寂しい玄関をあとにした。

朝の教室、ベタな噂

「おつす裕也。今日も相変わらず覇氣のない顔してんな」

学校に着き、自分の机に鞆をおろしていた俺に紳治——城野紳治きのしんじが後ろの席から立ち上がって声をかけてきた。

「うるさい。そういうお前は今日も寝癖が凄いぞ。そのボサボサ頭をいい加減どうにかしろ。幼稚園児じゃあるまいし髪くらい梳かしてきたらどうだ？」

「寝癖じゃねえつ。無造作セットなだけだつて何回言ったらわかるんだ？ 毎度毎度わかつて言ってるだろ？」

紳治のやつとは小学校からのつきあいで、俺の数多くはない友人の一人だ。俺とは正反対の「お調子者」な性格でいろんな意味で騒がしいやつなのだが、こんな風にお互い軽い減らず口を叩いたりしながら仲良くやってたりする。

いつもならここいらでもう一人現れるんだが……今日は休みか？

「おい紳治。鈴原のやつはどうした？」

俺の席の斜め前、いつもならショートカットの女子生徒がいるはずの空席に目を移しながら訊ねる。

「信乃か？ 休みじゃねえの？ 鞆もねえし。あと数分でチャイム鳴るけど、あいつつてば変に真面目なところあったりするから遅刻はないだろ」

休み、か。昨日に風邪でも引いたのかな。

まああいつのことだ、明日になればまたヒョッコリ出てくるんだろうけど。

「なあ、それよりもさ」

「ん？」

何故だか真剣な顔つきで詰め寄ってくる紳治。

「知ってるか？」

「何を？」

「——今日、転校生が来るらしいぜ」

転校生？ そりゃまたおかしい時期に来るもんだな。

「ふーん……」

「うわっ、リアクションうつすいな。他の生徒はみんなかなりびっくりしてたぞ？」

まあそりゃそうだろう。こんな受験間近に転校してくるやつなんて、受験しないやつかよっぱどの事情があるやつかしかないからな。そんな予想外のイベントには驚いて当たり前だ。俺だって少なからず興味がある。別に声を出して驚くことでもないと思うが。

しかしそんな俺の反応が期待はずれだったのか、いつの間にか紳治は何ともいえない残念そうな面持ちになっていた。こいつは俺にどんなリアクションを求めてたんだろう？

「で？ そいつはどんなやつなんだ？ 男か？ 女か？」

俺の質問に「知らん」と短く答える紳治。直接転校生を見たわけじゃないのか？

「今日の朝職員室行ったときに大澤達が話してたんだよ。ウチのクラスに転校生が来るとかどうのこうのって」

大澤っていうのはうちのクラスの担任で、生徒達にも人気のある若い男の教諭だ。

にしてもそれじゃあんま信憑性がないな……。転校生の顔見たってんなら話は別だが、教師達が『それらしい話』をしてただけでは証憑がなさ過ぎる。こいつの聞き間違えだって十分にあり得るし。

そこまで期待できるような話じゃないか。

「ところで紳治。今日職員室行ったってのはやっぱり……」

「んにゃ、今日は親父の話じゃない。ちよっくら体育委員の用事があっただけ」

そっか。なら別に問題ないな。

ガラガラガラッ

「おーし、みんな席に着けー。HR始めるぞー」

大澤先生が、立っている生徒達に着席するよう促しながら教室に入ってくる。相変わらずラフな私服だな。一度でいいからスーツをビシッと決めてる大澤先生を見てみたい。

「おわっ、大澤来たか。そんじゃまたあとでな裕也っ」

そう言つと紳治は自分の席に戻り着席する。

大澤先生は生徒が全員座つたのを確認するとゆっくりと口を開いた。

「えーっと、今日は大事な報せがある」

その言葉にクラス全体がどよめく。「男？ 女？」とか「城野の言つてたことはほんとだった」という声飛び交っているところをみるとほとんどのやつは紳治の情報を聞いているみたいだな。当の紳治は多分後ろの席でガツポーズなどをしてるんだろが、あいつが調子に乗っているのを見てしまつと間違いなく俺の拳が繰り出されそうなので振り向くのはとりあえずやめておく。

「『何故か』みんな知っているようだがウチのクラスに転入生が来ることになった」

みんなの視線が教室のドアへと集中した。中には中腰になっているやつもいる。

「ここで紹介……と言いたところなんだが、残念なことに今日はまだ来れないらしい」

それを聞いた生徒達は溜め息混じりに落胆の声を出す。たかが転校生で一喜一憂忙しいクラスだな。

「多分明日からの登校になるだろうが、お前らそんなに騒ぐんじゃないぞ」

大橋先生はそう言うと、名簿を開いて出席の確認を始めた。

俺はふと窓の外をしてみる。別に何があつたとかそういうワケじゃない。

……転校生、か。

別にそいつが来たからって俺の日常がどうにかなるわけでもないだろう。でも、ただなんとなく、

なんとなく、

久しくなかった新しい出会いに、

漠然とした期待を抱いてる俺がいた。

「——なんてな」

ボソリと呟く。俺は少女漫画かなにかのヒロインかよ。

黒板の前では、まだ大橋先生が出席を採っているところだった。

今日も一日、長くなりそうだな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0591b/>

イキルトイウコト - everlasting love -

2010年10月10日01時44分発行